

## 日本語教育実習生の受け入れと課題

Challenges in accepting teacher trainees in a Japanese language school

宮本真由美 MIYAMOTO, Mayumi

KCP 地球市民日本語学校 KCP International Japanese Language School

【キーワード】実習生受け入れの意義、外国人実習生

### 1. はじめに

本校は韓国からの学生の割合が多いという特徴がある。また、日本語教師養成講座も附設している。1995年にはじめての教育実習生を受け入れてから、これまで6大学、90名弱の実習生を受け入れてきた。

### 2. カリキュラムからみた受け入れ実態

カリキュラムの観点からみて、「教育実習」は大きく二つに分類できる。

#### ① 1週間パターン

5日間の授業見学を中心に行う。複数のクラスに入るが、いずれも見学または学習者との交流が中心となる。教壇実習が必要な場合は、特別クラスでタスク重視の授業を行うこともある。

#### ② 2週間パターン

「ホームクラス」と呼ばれる担当クラスを個々に設定する。単に見学だけでなく、アシスタントとしてクラス運営に参加する中で学生とのコミュニケーションを図り、信頼関係を築いてもらう。9日目あたりに、ホームクラスで教壇実習を実施する。正規クラス内で行う以上は、学生たちの顔と名前を一致させた上で授業をしてもらいたいと考えている。

それ以外にも初級から上級まで複数のクラスを見学し、各レベルでの学習上の問題点などを知る機会を与えている。また、クラス授業外でも学習者と接する機会を数多く設け、それらにただ参加するのではなく、必ず「考察」をしてもらう。さらに、それらすべての活動を「実習ノート」に

まとめて記入し、毎日提出することになっており、それに対するフィードバックも行っている。

1週間、2週間、いずれも1対1もしくは1対2で当校専任講師が担当としてつき、教案指導から実習のフィードバックまで責任をもって行っている。同じ日本語教育実習といつても、「交流中心」のものと、「教師養成を目的としたもの」とがあるといえる。

### 3. 実習生受け入れの意義と問題

これまで度々指摘されてきたことだが、教育実習は、どちらかといえば受け入れ側に負担がかかるものである。しかし、日本語教育界への貢献であると考えれば、他の業務となんとか折り合いをつけて、実習生の指導にあたるべきだと考えている。現場の教師にとっても、授業の振り返りになるよいチャンスになることは間違いない。「教室」という独立した空間の中で、日々どのような活動が行われているか、実習生の記録する「実習ノート」は、学校全体の教育力を向上させるための一助となるものであるとも考えている。より実りの多い実習とするべく、カリキュラムの改善など見直しの余地もあるだろう。

だが、残念ながらそれだけではどうしてもクリアできないこともある。それは、実習生自身の意欲とマナーの問題である。大学の授業の延長だというような感覚。アルバイトや就職活動との両立が原因か、眠そうにしている実習生も見受けられる。無断で遅刻する、授業見学中におしゃべりをする、寝ているなどやる気のない実習生を受け入

れてしまった場合、日本語学校はどこまで責任を持たなければならないのか。

また、最近では「外国人実習生の受け入れをどのようにすべきか」も大きな課題となっている。これらを日本人学生の受け入れの問題とともに検討していきたい。

#### 4. 外国人実習生の受け入れ

2週間の教育実習で外国人留学生を受け入れる際、正規のクラスで教壇実習できるかどうかを、これまで次のような要素で見極めてきた。

- ①【日本語力】正確さや流暢さにおいて、学習者を圧倒するものかどうか。
- ②【国籍】実習生が学習者の国籍と同じ場合、または異なる場合、学生にどのような心理的な作用があるか。
- ③【年齢】留学生の場合、一般的に日本人実習生よりも年齢が高いことが多い。ある程度上であれば、先輩としてアドバイスもしやすい。
- ④【人柄】教師養成プログラムである以上、リーダーシップがある、面倒見がよいなど教師としての適性、素質を備えているかどうかも大事な要素になる。
- ⑤【経歴や教育経験】教師経験などがあれば、プラスに働く。

日本人実習生も同様だが、実習前に来校してもらい、顔を見ながら話した上でクラスとのマッチングを行っている。もし、学生に不安や不信を抱かせるようであれば、正規クラスでの教壇実習は難しいので、特別クラスを設定するなど対応を考えるしかない。

また少し細かい話になるが、外国人であるがゆえの問題も見受けられる。

##### ①発音、アクセントの問題

##### ②文章力、表記上の問題

そもそも細かい助詞のミスや誤字、脱字が多く、それらを日本語学校の学生と同様に指導しなければならないこともある。

##### ③異文化的問題

どうしてもこちらの意図が伝わらないことがある。たとえば、「教師らしい服装」という言い方では理解してもらえないこともあった。また、教務室内では、実習生同士の母語使用を禁止している。あくまでも日本語教育実習に来ているのだから、校内は日本語で通すべきだと考えている。

##### ④学生と同国人同士であることによって起きる問題

同国人の学生から親しみをもたれることはいいのだが、頼られすぎてしまう、連絡先を教えてほしいといわれて困ったなどという話もあった。また、実習中に勉強方法やアルバイトの探し方、進学について、質問をうけることもあるようだ。もちろん、この場合、日本語学習の先輩としてむしろ日本人よりも効果的なアドバイスが期待できるかもしれない。

留学生の受け入れは何か問題だらけのような印象を与えててしまうかもしれないが、これまでの経験からいえば、全体的に熱心さ、取り組む姿勢などは、むしろ日本人学生よりも勝っているの方が多い。そして、ノンネイティブだからこそ気づきも多々あるはずである。

では、日本語学校の学生たちは外国人実習生のことを一体どのように見ているのだろうか。在校生にアンケートを実施し、大学からの日本語教育実習の受け入れについてたずねてみた。

まず、1つ目に、このような質問をしてみた。

KCP の授業の中に、実習生が入ることをどう思いますか。自分の考えに合う答えをチェックしてください。(複数回答可)

	上級	%	初級	%	計	%
先生が二人になるので、いい	25	26	15	34	40	28
クラスの先生以外の人とも親しくなれるので、いい	43	45	20	45	63	45
実習生が入ると授業の邪魔になる	4	4	1	2	5	3
実習生が見学するのはいいが、授業を担当するのはよくない	33	34	12	27	44	31
実習生が授業をするのもおもしろい	43	45	19	43	62	44
実習生がいても、いなくてもあまり変わらない	29	30	13	29	42	30
その他	4	2	1	2	5	3

このアンケートは初級の学生 44 名、上級の学生 95 名、計 139 名から回答をもらった。実施時期は少し異なり、初級の学生については、ある大学の教育実習が終わった直後に、アンケートを実施した。

- ・「先生が二人になるので、いい」 28%
- ・「クラスの先生以外の人とも親しくなれるので、いい」 45%
- ・「実習生が授業をするのもおもしろい」 44%

と、邪魔になるなど否定的な回答は少なく、総じて言えば好意的な回答が多いといえる。

これらについては、やはりなるべく多くの日本人との接触を求めているということだと考えられる。教師とは別の、自分たちと同年代で親しみやすい実習生と接する機会は、日本人との接触の機会が少ない日本語学習者にとって、貴重なのだろう。

ただ、一方で「見学するのはいいが、授業を担当するのはよくない」という回答も 30%を占めているため、その点についてもう少し詳しくみてみたい。

有効回答 139 のうち、「先生が二人になるので、いい」と「クラスの先生以外の人とも親しくなれ

るので、いい」という好意的な 2 項目のどちらか一方、または両方にチェックを入れた人は 76 名で全体の 54% である。

そのうち、「見学するのはいいが、授業を担当するのはよくない」と答えた人は 21%、「授業をするのもおもしろい」と回答した人は 46% だった。

つまり、全体の 54% は教育実習受け入れそのものに好意的であり、さらに、そのうちの約半数は「実習生が授業を担当するのもおもしろい」と考えている。おそらく、日々繰り返される教室での授業に、非日常性を求めて、実習生が入ること、授業をすることに興味を持つのではないかと思う。

一方、21% とそれほど多くはないとしても、「授業は担当してほしくない」と考える人がいることもわかる。プロではない実習生の授業に「付き合わされている」という感覚なのだろう。つまり、正規のクラスに受け入れる以上は、実習生にも一定以上の質を要求することになる。

次にこのような質問をしてみた。

日本語教育の実習生の中に外国人留学生が入ることについて、どう考えますか。自分の考えに合う答えにチェックをしてください。(複数回答可)

	上級	%	初級	%	計	%
外国人の実習生が入ることもいい	33	34	22	50	55	39
外国人の実習生は日本語学習の先輩なので、勉強になる	47	49	30	68	77	55
外国人の実習生は日本語以外のことでもアドバイスしてもらえる	46	48	24	54	70	50
外国人でも日本人でも、あまり変わらない	14	14	6	13	20	14
日本人ならいいが、外国人実習生が入るのは、よくない	16	16	2	4	18	12
外国人の実習生は母語話者ではないので、正しい日本語なのか心配だ	41	43	5	11	46	33
同じ国の実習生に習いたい	11	11	6	13	17	12
同じ国の実習生に習いたくない	7	7	0	0	7	5
その他	2	2	2	4	4	2

総じていえば、外国人の実習生が入ることに好意的であることがわかる。また、同国人の先輩に、有効なアドバイスがもらえるのではないかという期待があることもうかがえる。ただし、さきほどの1問目と比較すると、上級と初級の学生でかなり数値に差がでているところがある。上から3つの好意的な回答については、初級の学生の数値のほうが上回っている。この要因の一つとして、初級では教育実習受け入れ直後にアンケートを行ったため、実習全体によい印象が残っているのではないかと推測できる。

一方で上級の学習者は、「母語話者ではないので、正しい日本語なのか心配だ」という回答が多くなっている。初級の学生は、当然実習生との日本語力の差を認識しているからであろうが、上級の学生ともなると、「所詮ネイティブではないのだから。本当に正しい日本語なのか」と不安になるのではないだろうか。「せっかく日本語を習っているのに、たとえ30分であったとしても、ノンネイティブには教わりたくない」という心情も読み取れる。

また、今回のアンケートの「その他」の欄に、わずかではあるが、自分の考えを書いてくれた学生がいた。「実力があるなら授業を担当してもい

い。外国人でも実力が一番大事だ。」まさにその通りである。これまででも実際に日本人学生よりも高い評価を得た外国人実習生をみてきた。ただし、前述のように外国人実習生には確実にハンディがあり、それを乗り越える「熱意と覚悟」があれば、ということになるだろう。

## 5. 教育実習受け入れの今後

9月にも6人の教育実習生を受け入れたが、リーダーをしてくれたのは中国の女子学生であった。外国人留学生でも、受け入れ側がうまくコントロールすることによって、実習全体を活性化させ、教育実習全体にプラスの効果をもたらす存在になり得るのだ。

ただし、そのためには、大学の実習担当の先生方との信頼関係が構築できているかどうかが重要ではないだろうか。綿密な打ち合わせがあり、事前に実習生の情報がもらえれば、(性格や能力、将来のこと、どこに住んでいるかなど詳しく知ることができれば) カリキュラムの組み立てもしやすくなる。また、担当の先生が実習中にいらして、教壇実習を見学されたりする大学もある。

このように、担当者間に良好な関係があり、仮に問題が発生しても、すぐ相談できるような環境

が整っているということ、それが、実習を成功させる大きな鍵であるといえるのではないだろうか。

一方、「評価」については、今後の課題だといえる。外国人留学生の場合、実習に臨む態度などでプラス評価を得ることはできるかもしれないが、発音、アクセントや表記ミスなど多少目をつぶらなければならないこともある。それを成績評価にどの程度反映させるべきか。現在は、外国人だからといって特別な配慮はできるだけしないようにしている。しかしながら、個別に多少の考慮をしているのが現実であり、今後は統一的な基準を設けるべきではないかと考えている。

今後も外国人実習生の割合は増えるかもしれない。ただ、多くは国内の日本語学校に就職を希望するわけではない。であれば、教える「テクニック」だけを習得すればいいのかもしれない。また、母国に帰って教えることになるのなら、そもそも「直接法」で教える日本語学校に実習に来る意味は何だろうかと考えてしまう。その点では、今後外国人実習生用のカリキュラムを組むことも検討していく必要がありそうだ。